

## メタメタ倫理学あるいはメタ倫理学の理論は

### どのように他の哲学の諸理論に依存するか<sup>1</sup>

野上 志学

この論文ではメタ倫理学における諸立場の特徴づけ自体に対する考察を行う。他の哲学の分野と同様、メタ倫理には「実在論」や「反実在論」、「主観主義」や「客観主義」といった様々な立場が存在する。言うまでもないことだが、これらのどれが正しいのかを明晰に議論するためには、これらの立場が一体何を意味するのかを明晰に理解していなければならない。だが、それには原理的な困難がある。というのも、これらメタ倫理学の諸理論の定式化には真理概念や性質概念などの概念が用いられるのだが、それらの概念自体についてメタ倫理学の外部で様々な論争があり、その外部の論争においてどのような立場をとるかによって、メタ倫理学における立場の意味も変わってくるからである。この困難を打開するために、この論文では「認知主義」や「非認知主義」というラベルに焦点をあて、それらが他の哲学の諸理論にどのように依存するかを明らかにしたい<sup>2</sup>。「認知主義」と「非認知主義」がある概念を用いて特徴づけられているときに、その概念についてどのような背景理論が前提とされているかを明らかにしておかなければ「認知主義」と「非認知主義」は論争において実質的な内容をほとんどもたないと私は主張する。「認知主義」と「非認知主義」の実質的な主張が、「認知主義」と「非認知主義」を特徴付ける概念、とくに真理概念、信念概念、性質概念についての哲学理論へ依存することを示せば、この主張は支持されるだろう。（本論文の目的はあくまでメタ倫理学における諸理論が真理論や心の哲学にどのように依存するかを素描することであるから、いずれの領域であれどの理論が正しいかはあまり議論しないことを断っておく。）

#### 1. 真理

認知主義（C）と非認知主義（NC）を真理概念を用いて特徴付けるとしよう。真理概念で特徴付けられた認知主義（TC）とは「道徳文は真か偽である」という

立場であり、非認知主義（TNC）とはその否定、すなわち「道徳文は真でも偽でもない」という立場であるとしよう（cf., Ayer 1936, p. 107）。この節での我々の目的は、この区分（TC/TNC）が様々な真理論を背景にすると何を意味することになるのかを追跡することである。

「現在もっとも人気のある真理論である」デフレ主義（Horsten 2011）から始めよう。デフレ主義（真理についての「ミニマリズム」）は次の2つの主張からなる<sup>3</sup>。第1に、デフレ主義によれば、真理概念の内容は「文Sが真であるのは、sであるときであり、そのときに限る」というタルスキ双条件文（TB）によって規定される<sup>4</sup>。第2に、真理概念はこのように規定される以外の内容をもたない<sup>5</sup>。この2つ目の主張がデフレ主義を特徴付ける主張であり、デフレ主義を他の真理の諸理論から分かちつものである。比較対象として、真理の対応説を考えてみよう。対応説によれば、Sが真であるのはSが何らかの事実に対応しているときであり、そのときに限る。対応説は、TBを否定するのではなく、TB以上の内容が真理にはあると主張しているのである。この事情は認識説と呼ばれる理論でも変わらない。TBはある真理論をテストするための基準であり、TBを何らかのかたちで否定せざるをえないような理論は真理論としては失格である（Wrenn 2014）。

デフレ主義のもとで認知主義と非認知主義がそれぞれどのような主張になるかを考えよう。まず、Sが道徳文であったとしても、デフレ主義のもとではTBがSに適用できないと主張する理由はない（Blackburn 1998, p. 79）としよう<sup>6</sup>。「嘘をつくことは悪い」のような道徳文Sは統語論的には（例えば）物理的な述語しか含まない文と変わることはない文であり、実際にそのように使われている（Galen 1959, Geach 1965, Wright 1992）。そして、道徳文についての排中律が妥当だとすれば、sであるかsでないかのいずれかである。実際にsであるとしよう。すると、Sが真であるということはTBからすぐさま導かれる。（道徳文に適用されたTBは、例えば、「嘘をつくことは悪い」が真であるのは、嘘をつくことは悪いときであり、そのときに限る」である。そして、TBのもとでは、「嘘をつくことは悪い」からは、「嘘をつくことは悪い」は真である」が導かれる。）あるいは、sでないとしてみよう。すると、（Sが偽であるとは、Sの否定が真であることだから）Sが偽であることがTBから導かれる。よって、sであるかsでないとする、Sは真であるか偽であることがTBから導かれ、その逆も妥当である。それゆえ、デフレ主義のもとではTCは道徳文についての排中律と同値である<sup>7</sup>。そして、TCに反対するTNCは道徳文についての排中律を退けているということになる<sup>8</sup>。（非

認知主義を代表するエイヤー (Ayer 1936) やブラックバーン (Blackburn 1993) やギバード (Gibbard 1990) は道徳文についての排中律を拒絶することが彼らの立場を特徴付けるとは考えていない。したがって、伝統的な非認知主義者が念頭に置いていた立場を特徴付けることを目指すなら、デフレ主義的な真理概念を用いて認知主義と非認知主義を特徴付けるべきではないということになる。だが、どのラベルをどの立場と結びつけるべきかはもちろん、言葉上の些末な問題でしかない。) )

次に対応説を背景理論として採用すると TC と TNC がそれぞれ何に相当するのかが確認しよう。対応説とデフレ主義は真理について対立する理論だが、対応説が否定するのは TB そのものではなく、TB が真理について語るべきことをすべて尽くしているというデフレ主義の主張である。対応説によれば、真理には TB で述べられていること以上の何かがある。それは、真理とは事実との対応にほかならない、という主張である。

対応説のもとではしたがって、「道徳文は真か偽である」という TC の主張は、「道徳文は事実と対応しているか、あるいはその否定が事実と対応している」という主張になる。道徳文が事実に対応しているというのは何を意味するのだろうか。まず、「人助けは善い」という文あるいはその否定で表されるような道徳的事実が存在するための要件は、「人助け」という主語の指示する対象と、「善い」という述語の指示する性質が存在することだと考えられよう<sup>9</sup>。(メタ倫理学においては人助けが存在するということが前提とされてよいとすると) 結局のところ、例えば「善い」という述語が何らかの性質を指示しているならば、TC が正しいということになり、そうでないならば TNC が正しいということになる<sup>10</sup>。このように、対応説を前提とすると、TC/TNC は道徳述語の指示する性質が存在するかかという問題だということになる<sup>11</sup>。(性質の存在が何を意味するかについてはさらに第4節で論じる。)

今度は認識説と TC/TNC の関係をみていこう。整合説と呼ばれる、もっとも単純な認識説によれば、真理とは我々が受け入れていることと整合的であるということである。すなわち、真理とは整合的な文の集合に含まれるということにほかならない。だが、この単純なバージョンには明らかな問題がある。なぜなら、整合的で包括的な文の集合というものは無数に存在するからである。例えば、「地球は平らである」とか「イヴはアダムの肋骨から作られた」という文を含むような整合的な文集合は存在するが、誰もそれが真であるとは信じないだろう。したが

って、真理の定義に使用されるような整合的で包括的な文の集合には何らかの制限をかけなければならない<sup>12</sup>。そのような制限として見込みのあるやり方の1つとしては、整合的で包括的な集合は我々の認識活動の極限において受け入れられる文の集合であるというものであろう（Putnam 1981）。そこを参照して真理を定義するのがふさわしいと認識説がみなしている状態を何であれ、理想的な状態と呼んでおこう。すると、認識説によれば、ある文が真であるのは我々が理想状態において受け入れるであろう文の集合にその文が含まれるときであり、そのときに限る。すなわち、ある文が真であるのは、理想的な状態において我々がその文を受け入れるときであり、そのときに限る。

認識説にしたがうと、道徳文  $S$  が真であるのは、我々が理想状態でそれを受け入れるであろうときであり、そのときに限る、ということになる。そして、TC、すなわち、「道徳文は真か偽である」という主張は、（ある文が偽であることはその否定が真であることだとすると）我々が理想状態において  $S$  か  $S$  の否定  $\sim S$  のいずれかを受け入れるであろうということと等しい。すなわち、TC の主張は我々がそこにおいてあらゆる道徳文について  $S$  か  $\sim S$  を受け入れるであろうという完全な理想状態があるという主張と同値になる。（認識説のもとでの TC 自体は相対主義を排除していないことに注意してほしい。理想状態  $c_0$  と  $c_1$  が存在し、 $c_0$  では  $S$  が受け入れられ、 $c_1$  では  $\sim S$  が受け入れられるということと、（認識説のもとでの TC の主張である）すべての理想状態において  $S$  か  $\sim S$  のいずれかが受け入れられるということは論理的に独立である（cf. Wright 1992, p. 39）。）そして、TNC はそのような完全な理想状態は存在しないという主張ということになる<sup>13,14</sup>。

最後に、近年何人かの論者（Wright 1992, Lynch 2009）によって支持されている真理多元主義と TC/TNC の関係についても論じておく。真理多元主義は言ってみれば、対応説と認識説の折衷案である。真理多元主義の支持者によれば、真理には確かに TB で述べられていること以上のものがあるのだが、どのような文の真理に対してであれ、一元的に対応説あるいは認識説で説明しようとするには無理がある。なぜなら、我々の用いる文は物理的文、数学的文、道徳的文など、我々がそれについて真理を問いうる領域はさまざまな言説に分かれており、そして、それぞれの言説においてある文が真であるあり方というものは異なるからである。すなわち、多元主義によれば、物理的言説のように対応説が当てはまるような言説もあれば、認識説が当てはまるような言説もある。道徳について言えば、その言説に当てはまるのは何らかの認識説である。したがって、TC と TNC の多

元主義のもとでの実質的な主張は、認識説におけるそれと変わらない。

まとめよう。C/NC を真理概念によって特徴付けるとしよう。デフレ主義を仮定すると、TNC は道徳文についての排中律の拒絶と同値である。対応説を仮定すると、C/NC の区別は道徳文に対応する事実が存在するかどうか、そして、道徳述語に対応する性質が存在するかどうかという区別と同値になる（この区別が何に相当するかは第3節で論じる）。認識説を仮定すると、C/NC の区別は道徳判断に関する理想状態の有無と同値になる。真理多元主義を仮定する場合も同様である。このような実質的な主張がいかにお互いに異なるかということを考えれば、真理概念を用いて C/NC を特徴付ける際には常にどのような真理概念を用いているかについて明確にしておかなければならないということがわかる。

## 2. 信念

この節では信念概念を用いた C/NC の区別 (BC/BNC の区別) について論じる。BC/BNC の区別を提示する前に混乱を予防するためいくつかの用語の整理をしておきたい。この論文では「信念」は心的状態のことを指し、ある主体がその心的状態にあるときのその内容のことは「信念内容」と呼ぶ。信念が主体の命題的態度であるとするれば、信念内容は形而上学的には「命題」や「内容」と呼ばれるものに他ならない。（この論文では、「信念内容」と「命題」と「内容」は交換可能であるとしておく。）したがって、「ある p が信念内容（命題、内容）でありうるか」ということは、「p を内容としてもつ、信念という心的状態がありうるか」ということとは別の問題であることに注意しなければならない。道徳的命題が存在するとしても、我々がそれを内容としてもつ信念という心的状態にあることができることは帰結しないのである。

さて、信念を用いた C/NC の区別 (BC/BNC) は次のようなものになる。BC によれば、道徳的信念という心的状態が存在する。BNC によれば、道徳的信念という心的状態は存在しない。ここで道徳的信念とは、その内容が道徳文によって表現されるような信念である。例えば、BC によれば、嘘をつくのが悪いとあなたが信じているということがありうる一方で、BNC によれば、嘘をつくのが悪いということをあなたが信じていることはありえない。こうしてみると、BNC は道徳的信念についての錯誤理論にほかならない。（マッキー (Mackie 1978) に代表される道徳についての錯誤理論と混同しないように注意せよ。）すなわち、BNC は

単純な道徳信念文は体系的かつ均一に偽であると主張していることにほかならない。例えば、BNCによれば、「嘘をつくのは悪いことだと緑は信じている」という形式の文はすべて偽である。

BC/BNCは信念についての理論にどのように依存しているのだろうか。まずは信念についてのミニマリズム(BM)を考えてみよう。ドライバーはBMを次のように特徴付けている。まず、(ライトが述べたように)主張概念は信念概念に対して、「もし誰かが主張をなし、誠実であると想定されるならば、使用された文によって捉えられるような内容をもつ信念を彼女はもっているということが帰結する」というような「分析的結びつき」をもっている(Wright 1992, p. 14)。そして、平叙文Sが主張される際にそれによって表現されるような心的状態は、「自動的に、ミニマリスト的にはSという信念であるとみなされる」<sup>15</sup>。(Dreier 2004, p. 27, cf., Timmons 1999, p. 143)そしてTMと同様、BMは信念について述べるべきことはこの主張概念と信念概念についての結びつきに尽きている、と主張する<sup>16</sup>。さて、BMのもとでは、道徳的信念、すなわち、その内容が道徳文によって表現されるような心的状態の存在は、道徳文の主張という言語行為のカテゴリーの存在にのみ依存することになる。よって、BMのもとでは、BCは道徳文の道徳文の主張という言語行為の存在を主張することに相当し、BNCはそのような言語行為の非存在を主張することに相当する<sup>17,18</sup>。

BMは(心の哲学においてBMのような理論が真剣に取り上げられているとは思えないが)信念についての理論である。我々の目的はBC/BNCが信念についての理論にどのように依存するかを追跡することであるから、心の哲学において重要な位置を占める機能主義とBC/BNCの関係について考えてみるのがよからう。とりわけ、ここでは分析的機能主義と呼ばれる機能主義(Lewis 1972, 1994, Braddon-Mitchell et al. 2006)のもとで、BCとBNCのそれぞれがどのような主張になるかを考えてみよう。分析的機能主義は、常識心理学を様々な心的状態を特徴付ける理論であるとみなす。常識心理学のうちとりわけ重要なのは、心的状態の因果役割である。例えば、知覚によって信念は引き起こされるということや、ある欲求と、ある行為をなせばその欲求を満たすことができるであろうという信念はその行為を引き起こすであろう、といった信念の因果役割は我々のもつ信念概念や欲求概念において不可欠な部分をなしているかもしれない。このように、信念や欲求といった心的状態は、その因果役割を果たすものとされるところ。ここで重要なのは次のことである。信念であれ、欲求であれ、現実に存在する心

的状态というものは、常識心理学において記述される因果役割を果たすものに他ならない<sup>19</sup>。したがって、ある心的状態の因果役割を果たすことのない状態は、そのような心的状態ではありえない、ということになる。このことを踏まえると、BCの主張するように、道徳的信念が存在するのは、道徳文で表されるような内容をもっており、かつ信念の因果役割を果たすような心的状態が存在するときであり、そのときに限るということになる。そして、BNCの主張は道徳文で表されるような内容をもっており、かつ信念の因果役割を果たすような心的状態は存在しない、ということである。

まとめよう。一般的に、BC/BNCの係争点は、「道徳文で表されるような内容をもつ心的状態は信念であるか否か」にある。この主張が実質的に何に相当するかは心の哲学における理論に依存する。すなわち、「信念とは $\Phi$ を満たすような心的状態である」とする理論のもとでは、BCの主張は「道徳文で表されるような内容をもつ心的状態は $\Phi$ を満たす」という主張になり、BNCはその否定になる。BC/BNCの係争点は $\Phi$ に何を代入するかということによって実質的な主張がまったく異なりうる。信念概念を用いてC/NCを特徴付ける際にも、どのような信念概念を用いているのかについて明確にしておかなければならない。

### 3. 性質

この節では性質概念を背景としたC/NCについて論じる。性質概念を用いてC/NC(PC/PNC)を定式化すれば、認知主義(PC)は「道徳的性質が存在する」という主張であり、非認知主義(PNC)は「道徳的性質は存在しない」という主張になるだろう<sup>20</sup>。もちろん、あらかじめ言っておけば、PC/PNCは伝統的にC/NCとして念頭におかれていた区別とは異なる。だが、PCとPNCが性質についてのミニマリズム(PM)と非ミニマリズムの2つの考えにどのように依存しているかを確認することは2つの点で有益である。第1に、第1節で論じたように、対応説を背景としたC/NCの係争点は、道徳述語の指示する道徳的性質が存在するかしないかという点に帰着するが、それを争う一つの方法はPC/PNCのいずれかを擁護することであるからである。第2に、道徳的性質が存在するかどうかはそれ自体でメタ倫理学上の何らかの重要な区別であるはずであるからである。

真理や信念の場合と同じように、PC/PNCの区別を採用する場合、性質についてのミニマリズム(PM)が問題になりうる。PMによれば、性質概念は「 $x$ がFで

あるという性質をもつのは、 $x$ がFであるときであり、そのときに限る<sup>21</sup>」という双条件文（PB）によってその内容を与えられ、性質概念の内容はそれに尽きる（Dreier 2004, p. 26）。PMによれば、PB以外の性質についての実質的な区別というものはおよそ存在しない。これが何を意味しているかを理解するためには、PMが何を排除しているかを考えればよい。第1に、PMは「性質とは自然的性質に他ならない」という立場（自然的性質一元論, cf. Armstrong 1976）を排除している。第2に、PMはPBによって特徴付けられるミニマルな意味での性質概念の妥当性を認めるものの、自然的性質というものを恣意的でないかたちで特徴付けることができるという立場（Lewis 1986, 1995）も排除していることになる。（PMを第2の立場を排除しないと理解することもできるが、後の議論に影響しない。）

PMを採用した場合の問題は明らかである。PMを仮定すると、嘘をつくことは悪いということから、悪いという性質が存在することが帰結するように思われる<sup>22</sup>。したがって、PMによればPNCは、嘘をつくことが悪いということはない、ということを導く。なぜなら、PNCによれば、悪いという性質は存在しないからである。したがって、PMが正しいとすれば、PNCは、道徳文は体系的かつ均一に偽になるという道徳の錯誤理論（Mackie 1978, Joyce 2001）と同値になる。PNCが道徳の錯誤理論と同値になるからといってそれ自体は問題ではないが、伝統的には道徳の錯誤理論はNCとは区別されるべき立場とされてきた。それゆえ、PMを採用するとNCをPNCとして定義することは好ましくない。

だが、そもそもPMは擁護可能なのかと考えられるかもしれない<sup>23</sup>。先に述べたように、PMは「性質としては自然的性質しか存在しない」という自然的性質一元論を排除するだけでなく、「ミニマルな意味での性質のうちのサブカテゴリーとして自然的性質がある」というより穏健な立場も排除している。もしPBによって特徴づけられる意味での性質概念をC/NCの区別に採用することだけが問題ならば、「道徳的性質が存在する」というPCと「道徳的性質は存在しない」というPNCを次のように述べなればよいということになる。すなわち、PCは「道徳的性質は自然的性質として存在する」という主張であり、PNCは「道徳的は自然的性質としては存在しない」という主張だ、とPC/PNCを述べなればよいということになる。

このためには自然的性質という概念が恣意的でない概念だということを論じればよい<sup>24</sup>。幸い、自然的性質についてはいくつかの特徴付けがなされてきている。例えば、アームストロングによれば、自然的性質とは客観的な類似性と因果的な



力に基盤を与えるような性質である<sup>25</sup>。すなわち、ある自然的性質を共有している2つの対象は、客観的な意味で類似しているであろうし、ある自然的性質をもつ対象はその自然的性質に応じた因果的な力をもつことになる。例えば、電子であるという性質や（ある特定の）質量をもつという性質のような、典型的には物理学に登場するようなタームの表す性質は完全に自然的な性質であるといえる。もちろん、性質の自然さには程度がある。完全に自然的な性質を表すタームを用いて定義されるようなタームで表される性質は自然性の程度は劣るにせよ、派生的な意味で自然的性質であるとみなしてよい<sup>26</sup>。

自然的性質を因果的な力に基盤を与えるような性質として理解するというやり方は、メタ倫理学上の自然主義をめぐる論争（Harman 1977, Sturgeon 1988）にも見受けられる。それによれば、ある性質 P が自然的性質であるのは、P が消去できないかたちで我々の経験の最良の説明に登場するときであり、そのときに限る（Miller 2011, Sinclair 2011）。これが何を意味するのかをみるために、有名な「ヒトラー事例」を考えてみよう。ヒトラーが道徳的に墮落していたということは、ヒトラーは道徳的に墮落していたと我々が信じていることを説明する（Sturgeon 1988, p. 149）。「もしヒトラーが道徳的に墮落していなかったとしたら、ヒトラーは道徳的に墮落していたと我々が信じないだろう」という反事実条件文が成り立つことによってこのような説明は可能になる。実際、このような説明は因果的説明とみなされる。因果的説明とは原因であるところの出来事ないし状態を挙げることによって結果を説明することであるから（Lewis 1986b）、ヒトラー事例はまっとうな説明であるとみなすことができよう。

自然的性質を恣意的でない仕方で特徴付けることができるのであれば、PM は誤りということになる。そして、自然的性質という概念を用いて PC/PNC の特徴付けをおこなうことができるということになる。これまでに私は、真理概念や信念概念を用いて C/NC を特徴付ける際には、真理概念や信念概念についての背景理論を明確にしておかなければ、いかに自らの立場に「認知主義」と「非認知主義」というラベルをつけてみたところでメタ倫理学上の実質的な主張は明らかにされたことにはならないと論じてきた。これは真理概念や信念概念についてはメタ倫理学に異なる帰結をもたらさうとする理論が可能だという事情による。だが、性質概念、とくに自然的性質の概念についてはやや事情が異なる。というのも、自然的性質というカテゴリーを認める論者にとってはいずれの場合にも、自然的性質が客観的な類似性と因果的な力に基盤を与えるような性質であるということに

においては一致しているからである。しかしながら、C/NC は自然的性質によって特徴づければよいというわけでもない。なぜなら、PC/PNC の区分はむしろメタ倫理学において自然主義と呼ばれてきた立場（Sturgeon 1988, Railton 1986）とその否定という区分に対応するからである。

まとめよう。PM を採用すると PNC は道德についての錯誤理論と等しく、PC はその否定と等しくなる。また、自然的性質を用いて PC と PNC はそれぞれ「道德的性質は自然的性質である」という自然主義とその否定と同値になる。

#### 4. メタ倫理学の論争はどのようにすれば進められるか

この論文では、ある概念についての特定の背景理論のもとでは、その概念を用いて定式化された認知主義と認知主義のそれぞれが実質的にどのような主張になるかということ概観してきた。それぞれを背景理論とした場合の大幅な差異を踏まえると、認知主義あるいは非認知主義の主張はその概念についての背景理論と相対的にしか実質的な主張をもたないといっても過言ではない。だが、そのような背景理論を明示している限り、メタ倫理学上の区分は実質的な区分となりうる。

メタ倫理学上の主張がある背景理論のもとになされたとすると、その主張の是非を争うにはどのような方法があるだろうかということ簡単に述べて議論を終えることにしよう。第1に、その背景理論の是非を争うことができよう。例えば、真理や信念、性質といった概念すべてについてのミニマリズムを取ることは論理的には可能である。だが、それらのミニマリズムが正しいかどうかということはメタ倫理学上の問題ではなく、真理であれば真理論、信念であれば心の哲学、性質であれば形而上学といった部門において決着をつけられるべき問題である。他部門においてもっともらしくない理論を前提としているメタ倫理学上の学説は退けることができるだろう。第2に、他部門の理論を前提としたうえでメタ倫理学固有の主張を争うこともできる。例えば、信念とは $\Phi$ であるような心的状態であるという心の哲学における主張が前提とされているとき、（ $\Phi$ が心の哲学の諸理論に解釈の依存するようなタームを含んでいないとすると）道德文で表されるような心的状態が $\Phi$ を満たすかどうかを考えるのはメタ倫理学固有の仕事である。

<sup>1</sup> 本稿の内容は、JSPS 科研費（特別研究員奨励費）（18J14593）の助成を受けた研究の成果の一

部である。またこの論文の草稿に有益なコメントをしてくださった松井隆明氏と高崎将平氏と谷田雄毅氏に感謝する。

<sup>2</sup> 本稿では「実在論」、「反実在論」、「非実在論」という特徴付けは扱わない。実際のところ、それらの特徴づけようとする際にも「認知主義」や「非認知主義」の特徴付けを行う際に生じるのと同様の問題が生じるであろうからである。同様の理由で「記述的」という語を使用することも避けている。私には評価的でないという意味以外で「記述的」が何を意味するのかわからないが、そうすると「記述的でない」は評価的であるということと同値になり、道徳語はトリヴィアルに「記述的でない」ことになる。

<sup>3</sup> 用語上のひとつの注意を述べておけば、ミニマリズムは本論文で「デフレ主義」と呼ばれる一群の理論一般を指すこともあれば、デフレ主義の一種である Horwich 1990 の理論を指すこともある。さらにややこしいのは、Wright 1992 が彼の多元主義的真理論をミニマリズムと呼んでいることである。本論文では「真理についてのミニマリズム」はデフレ主義一般のことを指すものとして使用する。

<sup>4</sup> 真理述語が自己適用可能であり、古典論理を前提としているときは、パラドクスを回避するためにタルスキ双条件文は何らかのかたちで制限されなければならない。自然言語がおおよそ古典論理を使用しており、さらに真理述語は自己適用可能でわるように思われるから、自然言語の真理述語の(理想化された)振る舞いを記述する理論はタルスキ双条件文に代わって Friedman-Sheard 理論や Kripke-Feferman 理論などの理論を採用しなければならない。古典論理をベースにした公理的真理理論については、Halbach 2011 ならびに Horsten 2011 を参照せよ。また、非古典論理を用いてタルスキ双条件文を保存する試みのサーヴェイとしては、Beal et al. 2018 を参照せよ。

<sup>5</sup> 典型的には真理述語の機能は一般化の道具だという主張が加えられる (Field 1994)。

<sup>6</sup> デイヴィッドソンはデフレ主義者ではないが、極めて興味深いことに Davidson 1967 は「よい」のような評価概念を含むか否かはタルスキ双条件文が適用可能かとは関係がないと論じている。

<sup>7</sup> TNC と道徳文についての排中律を退けることが同値になるという帰結を防ぐために、TB のカバーする範囲を制限するということが考えられるかもしれない。「TB が適用可能であるためには S が命題を表現するものでなければならない」という制限はどうだろう。だが、私には S が命題を表現するかどうかについての有意味で明確な制限をどのように加えればよいのかはわからないし、命題については「S は s であるという命題を表現する」という規定によって命題概念の内容は規定され、その内容によって命題概念の内容は尽きているという(命題についての)ミニマリズム (Dreier 2004, p. 26) も魅力的な立場であるように思われる。もうひとつの制限方法としては、「S に出現する述語が真正の性質を指示するのだからなければならない」というものがある。この制限に関連する条件については第 3 節で論じる。

<sup>8</sup> 排中律を退ける代表的な論理としては直観主義論理とパラコンプリート論理がある。直観主義論理について van Dalen 2013 を、パラコンプリート論理については Priest 2012 を参照せよ。

<sup>9</sup> すべての論理的に複雑でない道徳文 S について  $\sim S$  を主張する場合にも TC は真になる。このとき TC は道徳についての錯誤理論と等しいことになる。ここではこの可能性を無視し、TC が正しいとすれば少なくとも 1 つの論理的に複雑でない道徳文が真であることを仮定しておく。

<sup>10</sup> S か  $\sim S$  のいずれが事実に対応するとしても、いずれにせよそれは道徳的性質の存在を前提とするのだから、TC は道徳的性質の存在を前提とするということになる。

<sup>11</sup> 「指示する」についてのデフレ主義をとるのであれば、道徳述語が何らかの性質を指示することにはメタ倫理学上の実質的な区別をもたらすことにならないだろう。(指示についてのデフレ主義としては、Leads 1978 および Field 1994 を参照せよ。)

<sup>12</sup> 認識説についての有益な議論としては、Wright 1992, ch. 2 および Wrenn 2014, ch. 4 を参照。

<sup>13</sup> このように考えると、認識説(あるいは多元主義)のもとでの TC と反応依存的理論 (cf. Lewis 1989) や構成主義は実質的に異なるのかという疑問が出てくるかもしれない。この問題をここで詳論することは紙幅の関係でできないが、反応依存理論と構成主義のいくつかは(認識説や多元主義のもとでの TC と異なり)対応説に依拠していると解釈するのが自然であるように思われる。(関連する議論は後注を見よ。)

<sup>14</sup> 本論文では理想状態に訴える認識説を認識説の典型例として用いるが、これはあくまで認識説の一例である。別の例としては「超主張可能性」に訴えるものがある (Wright 1992, p. 48)。

<sup>15</sup> BMを支える議論は、ライトの言う「分析的な結びつき」を額面通りに捉えることに依存している。すなわち、現実世界においてはいつも、Sを誠実に主張する人はSによって内容を表現される信念をもっている、という風に主張しなければ、道徳文の主張からすぐさま道徳的信念の存在は推論できない。しかし、控えめにいってこれは疑わしいと言わざるをえない。第1に、主張は言語行為のカテゴリーであり、信念は心的状態のカテゴリーである。そのような異なるカテゴリーの間にそのような連関が現実世界では必ず成り立っているというのは(少なくとも強力な議論がない限りは)不可解である。また、問題の分析的結びつきが、少なくとも現実世界では必ず成り立つような強い結びつきよりも、「他の条件が等しければ」条項が付け加えられるような緩やかな関係であるならば、道徳的主張という言語行為が存在するからといって道徳的信念の存在がすぐさま導出されることはない。(一般に主張という言語行為の存在を示唆するだけで、「信念」と呼ばれる心的状態など存在しないとする消去的唯物論 (Churchland 1981) を論駁できるとは思えない。) 第2に、BMは「分析的な結びつき」が信念を(欲求などの)他のあらゆる状態から区別できるということを前提としている。だが、この前提には反例がある。なぜなら、いわゆる全面的信念 (full belief) だけでなく、部分的信念 (partial belief) も主張との分析的な結びつきを満たしうるからである。すなわち、もし全面的信念について「Sを誠実に主張する人はSによって内容を表現される信念をもっている」ということが正しいのであれば、例えば、1/3以上の度合いで信じるという(全面的信念とは異なる)心的状態も、「Sを誠実に主張する人はSによって表現される内容を1/3以上の度合いで信じている」ということも正しい。それゆえ、BMは誤りである。第2に、「他の条件が等しければ」条項だけでなく、主張との「分析的結びつき」に部分的信念と区別するのに十分なような別の「分析的結びつき」を加える(例えば、「全面的信念とはたいてい我々が実践推論において前提とするものである」という条件を加える)のであれば、これは信念と欲求を別の心的状態として区別するのに十分であるように思われる。このとき、道徳文の主張の際に我々が典型的に置かれている心的状態が(欲求に類比的な心的状態ではなく)道徳的信念であると主張するためには、道徳的信念が(通常的信念と異なり、欲求と同じように)我々を一定のしかたで動機づけるように思われるという事実を説明しなければならなくなる (cf. Blackburn 1984)。このように「分析的結びつき」に頼って道徳的信念の存在をすぐさま導くことはできない。そのためには、心の哲学に関する疑わしい前提をいくつか持ち込まねばならなくなる。

<sup>16</sup> もしかすると Dreier 2004 や Timmons 1999 で念頭に置かれている立場は「信念について述べるべきことはこの主張概念と信念概念についての結びつきに尽きている」という主張にはコミットしておらず、ある種の信念についての多元主義を奉じているのかもしれない(この可能性については松井隆明氏に示唆された)。信念についての多元主義はおそらく「現実世界においてはいつもSを誠実に主張する人はSによって内容を表現される信念をもっている」という主張に加えて、(真理多元主義において言説の領域ごとにある文が真であるあり方が異なるように)その内容に応じて心的状態が信念であるあり方が異なるのだ、というものになるだろう。だが前注で述べた議論はそのような多元主義にも当てはまる。例えば、「分析的結びつき」は(どの言説の信念であれ)全面的信念一般を部分的信念一般から区別できないという点はそのまま信念についての多元主義にも当てはまる。

<sup>17</sup> 厳密に言えば、BMのもとでは道徳文の主張という言語行為はあくまで道徳的信念の存在のための十分条件であって必要条件ではないので、BMのもとでBCがこの言語行為の存在と同値であるわけではない。だが、BMのもとでは、信念概念の内容は主張概念との結びつきに尽きているのであるから、BMのもとで道徳文の主張がありえないとなると、BCは実質的に道徳的信念についてただそれが存在するということを説明せずに言い張っているだけ、ということになる。よって、BMのもとではBCは道徳文の主張という言語行為の存在は道徳的信念の存在の必要条件でもある、と考えてよい。

<sup>18</sup> 本論文では紙幅の都合上、主張概念を用いてC/NCを特徴づける方法について論じることは

できないが、主張についてのミニマリズム (Wright 1992) とそのメタ倫理学上の帰結は何人かの論者によって支持されている (Glassen 1959, Joyce 2001)。

<sup>19</sup> 心的状態を表すタームの指示対象をその役割を果たす下位レベルの状態とみなすか、それともその心的状態の機能そのものを指示対象とするかについては議論が分かれるが、ここでの議論には関わらない。

<sup>20</sup> ここで PC/PNC の区別と TC/TNC の区別の関係について述べておこう。第2節で論じたように、TC/TNC の区別のもとでさらに真理についての対応説を採用する場合は、TC は「道徳文や道徳述語が対応するような事実や性質が存在する」という主張になり、TNC は「道徳文や道徳述語が対応するような事実や性質は存在しない」という主張になる。TNC が成り立つのは、道徳的事実や道徳的性質が存在しない場合であるか、それらが存在するものの、道徳文や道徳述語との対応関係が成り立っていない場合であるかのいずれかである。したがって、対応説を採用する場合は、PNC は TNC を含意する。

<sup>21</sup> Lewis 1983 はミニマルな意味での性質の特徴付けとして PB に相当するものを採用している。ただし、彼は PM にコミットしているわけではなく、自然的性質という概念を認めている。

<sup>22</sup> 厳密に言えば、「 $x$  が F であるという性質をもつ」において、「F であるという性質」が量化可能なかたちであらわれていなければならないため、ここではそのように仮定しておく。(ここでは Quine 1948 にしたがって量化可能性と存在を同一視している。) この仮定を取り去った場合は、PM は PNC の否定を導くことはなく、PNC の主張は「F であるという性質」は量化可能でないという主張になる。

<sup>23</sup> 性質についての一切の形而上学的な特徴付けを拒絶するグッドマンですら PM を受け入れるのかどうかは怪しい。Goodman 1983 において彼の区別する投射可能な (projectable) 述語とそうでない述語 (例えば「ブルー」) の区別は PM と背馳するように思われる。なぜなら、こういった述語の区別からは、ミニマルな意味での性質のうち有意な区別があることが帰結するからである。

<sup>24</sup> ここでの議論では、自然的性質という概念が定義できることまでは要請しなくともよいということには注意しなければならない。因果性や類似性といった概念との関係をひとまず明示化すれば、メタ倫理において実質的な区別をするには十分である。自然的性質と因果性の一定の結びつきがあるとすれば、すべてのものはすべてを引き起こすという馬鹿げた主張をしない限り、すべての性質が自然的性質だと論じることはできない。

<sup>25</sup> Armstrong 1978 および Lewis 1983, 1986 を参照せよ。近年の発展としては、Sider 2011 を参照。

<sup>26</sup> Lewis 1986, ch. 1. ただし、スタージョン (Sturgeon 1988) のような非還元的自然主義によれば、道徳的性質は自然的性質であるものの、物理学に登場するようなタームによって定義不能な独特な (sui generis) 性質である。自然的性質の定義を広くとり、因果的な力の基盤になるという点のみを自然的性質の特徴だとすれば、そのような立場からみても道徳的性質は自然的性質なのだ、ということができる。

#### [参考文献]

- Armstrong, D., 1978, *Universals and Scientific Realism*, Vol. I, Cambridge University Press.  
 Ayer, A., 1936, *Language, Truth, and Logic*.  
 Beall, JC, Glanzberg, M., and Ripley, D., 2018, *Formal Theories of Truth*, Oxford University Press.  
 Blackburn, S. 1984, *Spreading the Word*, Oxford University Press.  
     1993, *Essays in Quasi-realism*, Oxford University Press.  
     1998, *Ruling Passions*, Oxford University Press.  
 Braddon-Mitchell, D., and Jackson, F., 2006, *Philosophy of Mind and Cognition*, 2nd ed., Blackwell.  
 Churchland, P. M., 1981, 'Eliminative materialism and the propositional attitudes', *Journal of Philosophy*, 78: 67–90.  
 Van Dalen, D., 2013, *Logic and Structure*, Springer.  
 Davidson, D. 1967, 'Truth and meaning', reprinted in his *Essays on Truth and Interpretation*.

- 1963 'Actions, reasons and causes', reprinted in his *Essays on Actions and Events*, Oxford: Clarendon Press, 2nd ed.
- Dreier, J. 2004, 'Meta-ethics and the problem of creeping minimalism', *Philosophical Perspectives*, 18: 23–44.
- Field, H. 1994, 'Deflationist view about meaning and content' reprinted in his *Truth and the Absence of Facts*, 2001, Oxford University Press.
- Finlay, S., 2007, 'Four faces of moral realism', *Philosophy Compass*, 2.
- Gibbard, A., 1990, *Wise Choices, Apt Feelings*, Harvard University Press.
- Geech, P. 'Assertion', *Philosophical Review*, 74: 449–465.
- Glassen, 1959, 'The congruence of moral judgements', *Mind*, 68: 57–72.
- Goodman, B. 1983, *Fact, Fiction, Forecast*, Harvard University Press.
- Halbach, V., 2011, *Axiomatic Theories of Truth*, Cambridge University Press, revised edition 2014.
- Harman, G., 1977, *The Nature of Morality*, Oxford University Press.
- Hausman, D., 2005, 'Causal relata: Tokens, Types, or Variables?', *Erkenntnis*, 63: 33–54
- Horsten, L., 2011, *The Tarskian Turn. Deflationism and Axiomatic Truth*, MIT Press.
- Horwich, P., 1998, *Truth*, 2nd ed., Oxford University Press.
- Joyce, R., 2001, *Myth of Morality*, Oxford University Press.
- Korsgaard, C., 1996, *The Sources of Normativity*, Harvard University Press.
- Lewis, D., 1972, 'Psychophysical and theoretical identifications', reprinted in his *Papers in Metaphysics and Epistemology*, Cambridge University Press.
- 1983, 'New works for a theory of universals', *Australasian Journal of Philosophy*, 61: 343–377.
- 1986, *On the Plurality of Worlds*, Blackwell.
- 1986a, 'Events', in his *Philosophical Papers*, Vol. 2, Oxford University Press: 241–269.
- 1986b, 'Causal explanation' in his *Philosophical Papers*, Vol. 2, pp. 214–240.
- 1989, 'Dispositional theories of value', *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volume*, 63: 113–137.
- 1994, 'Reduction of mind' reprinted in his *Papers in Metaphysics and Epistemology*.
- Leeds, S., 1978, 'Theories of truth and reference', *Erkenntnis*, 13: 111–129.
- Lynch, M., 2009, *Truth as One and Many*, Oxford University Press.
- MacFarlane, J., 2014, *Assessment Sensitivity*, Oxford University Press.
- Miller, A., 2014, *Contemporary Metaethics*, 2nd ed., Polity.
- Priest, G., 2012, *An Introduction to Non-Classical Logics*, Cambridge University Press.
- Putnam, H., 1981, *Reason, Truth, and History*, Cambridge University Press.
- Quine, W. V. O., 1948, 'On what there is', reprinted in his *From a Logical Point of View*.
- Railton, P., 1986, 'Moral realism', *Philosophical Review*, 95: 163–207.
- Sider, T., 2011, *Writing the Book of the World*, Oxford University Press.
- Sinclair, N. 2011, 'The explanationist argument for moral realism', *Canadian Journal of Philosophy*, 41:1–24.
- Smith, M., 1994, 'Why expressivists about value should love minimalism about truth', *Analysis*, 54: 1–11.
- Sturgeon, N., 1988, 'Moral explanations', in G. Sayre-McCord ed., *Essays on Moral Realism*, Cornell University Press.
- Timmons, M., 1999, *Morality without Foundations*, Oxford University Press.
- Woodward, J. *Making Things Happen*, Oxford University Press.
- Wrenn, C., 2014, *Truth*, Polity.
- Wright, C. 1992, *Truth and Objectivity*, Harvard University Press.